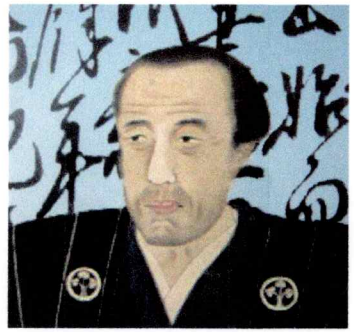
のこのこの歴史ばなし　　令和3年11月26日（金）

徳川の世に、我らの領主（殿様）だった

駿河田中藩本多家の足跡をこの地

（藤心・増尾・泉）などに辿ってみた



十二代　正訥公
まさもり公

①陣屋道・陣屋跡・法林寺・観音寺・正重公・正訥公

②駿河田中藩本多家の下総での領地

③本多家歴代の殿様　関ケ原～幕末維新

④藤心陣屋と慈本寺の田中藩士の墓石

⑤二代正貫（まさつら）公と龍泉院（泉）

⑥七代正珍（まさよし）公と神明社・廣幡八幡宮

⑦五代正武（まさたけ）公と布施弁天

前　編

新ふるさと・探訪　第43回（逆井・藤心のお殿様）

駿河国（田中藩）本多家物語①　藤心陣屋

ご挨拶

かつて、この広報紙の「新ふるさと・探訪」で（奥州の雄・相馬氏）と（流浪の女性詩人・江口章子）を紹介しましたが、それに続く大きなテーマ（藤心・逆井の領主・本多家）を約10回前後を予定に連載してゆきます。約10年前、私は大病を患い退院後姉の勧めで越してきたのがこの逆井・藤心でした。療養の為2年弱は付近の散歩に明け暮れました。もの心ついてから9回目の引越しでしたが、それ迄に農村風情の残る町に住めたことはありませんでした。森や林それにお寺神社、単線の電車どれも心休まるものばかり、一命をとりとめ辿りついた土地が私にとっては理想郷だった訳です。埋もれた歴史のテーマを与えてくれたこの地に、少しの探求の実を表す場を与えてくれたサンハイツの皆様に感謝の次第です。

【じんや道と陣屋跡】

①　平成30年3月に発行の藤心ふる協の広報紙で「じんや道」が紹介されていた。県道51号線（松戸・柏線）から分岐し逆井駅踏切を通る道（逆井商店街通り）を言っている。「陣」は基本武士の用語だ。今に残る用法は、出陣式、着陣、陣取る、陣頭指揮、陣中見舞い、陣営、報道陣等、何かの行動を鼓舞し勇ましく表現するのに使われている。

②「陣屋」とはかつて武士の戦場、駐留や駐屯した時の土地や建物を意味していた。徳川時代大名の参勤交代（国元⇔江戸）の往復は単なる赴任や離任の物見湯殿の旅ではない、将軍家が一大事。（スワ鎌倉！）なので軍を率いて駆けつける軍事行動なのだ。だから、宿泊場所（地）は旅館・旅籠・宿ではなく「本陣」と称されていた。

③　関ケ原後多くの大名が淘汰され一城を領する事が赦された。一城のみである。1～3万石規模の小大名は「城」でなく居住と領地差配の役所屋敷で「陣屋」と称された武装屋敷だ。柏近くの牛久藩や下妻藩は1万石なので当然「城」ではなく「陣屋」であり、城を構えるのを赦された大名は、関宿藩久世家5.8万石・佐倉藩堀田家11万石であった。

④　駿河国（静岡県）田中（藤枝市）に本多家の藩が（4万石）田中藩としてあり、下総国（千葉県）に現在の柏市を中心とする1万石相当の領地を飛地として領有していた。いわば、藤心陣屋とは「田中藩庁下総国藤心出張所」か「分室」であったし、同様な出先機関は柏市北部船戸にも「船戸陣屋」としてあったのだ。（後日紹介）

⑤　サンハイツ敷地に面し「木戸前第2公園」がある。だったら木戸前第3・4公園はあるのか、あるのなら何処にあるのか？調べてみた。第4は無かったが第1公園は増西小の近く（増尾台）第3はサンハイツの北西（東逆井1丁目）英語塾の奥にあっ「じんや道」と刻まれた道標📷から約半里、小字の「木戸前」の地名3ヶ所の児童公園にその名を残す。なにか縁（えにし）が感じられるはないか。「木戸」と呼ばれるモノがあり、どう、管理運用されてのか興味は尽きない。今の商店街通りは役所前通りだったのだ。

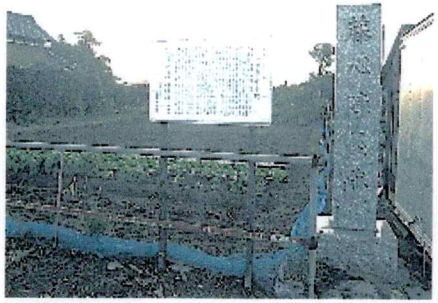
⑦　逆井駅より約1.5km東へ、八幡社を過ぎるとすぐ左に「藤心陣屋跡」の案内📷が在り我々を、徳川時代に当地を統治していた殿様（本多家）の世界へいざなってくれる。

⑧　ここでの注目点は何といっても「藤心陣屋跡📷」の石碑と柏市教育委員会作成の「柏市文化財めぐり代官所と本多候」表示板📷だ。ここを起点として郷土の400年の「来し方」の物語を辿ってみる。本多家の名残・足跡は柏市の随所に見られる。

⑨　探訪のポイントは、明治2年の陣屋廃止、下総国領域に42ヶ村、曹洞宗慈本寺、柏市や周辺市域の足跡、藩祖本多正重📷、最後の藩主本多正訥📷、船戸藩立藩（元和元年）、沼田藩時代、田中藩時代、維新時田中藩の動向、維新後の長尾藩（館山）等か。

⑩　現在、この場所は農地であり隣接するお屋敷のお人は明治以降に越してきた方と聞く。陣屋は「お代官」と呼ばれ駿河国田中（静岡県藤枝）の藩庁より派遣される。藩士は僅かな人数であったようだ。敷地は660坪+α（農地）の記録があるが何処までか特定できない。

じんや道の道標



陣屋跡 石碑と市教育委員会の案内板
藤心字大宮戸

碑の裏面にも注意

陣屋跡への案内

移築された陣屋の二ツの門（↓）

観音寺（逆井）

法林寺（名戸ヶ谷）

藩祖本多正重公

十二代本多正訥公

注）参考文献・柏市史(近世編）・柏の歴史・歴史ガイド かしわ・柏市史年表・田中本多藩と柏（郷土資料室版）・PC（Wikipedia)・江戸幕府の権力構造・日本の歴史16（小学館）・江戸幕府その実力者たち（人物往来社）・金子幸司さん談話（藤一町会）・流山市史・鎌ヶ谷のあゆみ・鎌ヶ谷郷土資料館刊（展示資料翻刻集）

注）文中で📷のマークが付いたら写真の掲載があるという印です。（例、本多正重公肖像画📷）

注）この連載はあくまで「ものがたり」です。学術的には責任を負えませんので気楽に読み飛ばしてください。

※　次回は本多家の柏での領地を探訪します。　　（文責：荻野）R2.3

新ふるさと・探訪　第44回（逆井・藤心のお殿様）

駿河国（田中藩）本多家物語②　（柏市域本多領）

上野国沼田藩時代と駿河国田中藩時代、共に、本多家石高は四万石
そのうち飛び地、下総国での一万石相当領地の詳細をご紹介。

☆ **石高から国力がわかる。**（保有可能軍事力を見ると）1石は1人の人間が1年間で食べる量とされている。（＝1万石で1万人が1年間生きられる＝領地）、1万石の藩では→1万人の人口→武士の比率10%（諸説あるがザックリいって）→武士階級1000人→半分女→男500人→半分仲間小物→武士は250人→半分は老人子供病人赤子→いくさで戦えるの戦力は約100人。4万石だと400～500人程度。殿が江戸にいる時は半分近くは江戸か、では国元には何人か？戦国期は別。藤心ふる協の人口は14,500人（2015年）14500石相当、サンハイツはほぼ140人　140石だ。

① 本多家の領地42ケ村の半分は現柏市域にあり、他の半分は近隣6ツの市域にある。周囲には幕府直割地・旗本の知行地、が細かく混在している。まるでモザイク模様状態だ。下総は江戸に近い為「潜在的武力」を蓄えられないように幕府は極限まで領地を微細化したのだ。我々もそう遠慮することはない。千葉県＝下総国といえども天保年間頃では68万石の生産量があり（Wikeデーター）があり、一国として一大名が支配すれば加賀前田100万石、薩摩島津77万石に続く第3位の国力で決っして侮れない（？）国であったのだ。英雄がでれば、もしかしたら「大河ドラマ」の栄誉を得たかもしれない。

② 本多家と下総領の縁は本多正信の弟正重（まさしげ）が1616年に相馬・葛飾郡内に一万石を拝領したことに始まる。正重それ以前は近江国（滋賀県）坂田郡内に千石の領地を関ケ原の褒章として得ていた。禄が千石から一万石への大幅昇給の快挙、それは豊臣方を滅亡させた大坂の陣の武功が認められたのだ。豊臣を倒し自信を深めた家康が三河以来の譜代で課長クラスの家臣団にも大名（一万石）の格式をボーナスしたのだろう。

③ 余談だが、上記の滋賀県「坂田郡」は平成17年10月近江町が米原市に編入し「郡」が消滅してしまった。同年は沼南町が柏市に編入され「東葛飾郡」が消滅した年でもある。同じく同年に利根川の向こう岸にある藤代町が取手市に編入された。結果住居表示に「北相馬郡」を冠するのは唯一「利根町」だけとなり令和の現在に続く。ガンバレ利根町である。

④ 私ごとで恐縮だが、母の実家の古い住所を憶えている。小学生の頃は夏休み1ヶ月を祖母のもとで過ごした。農村を知らない私の貴重な原風景として残る。そこは岐阜県稲葉郡芥見村字大洞である。何故覚えているか、お世話になった祖母や従弟にお礼のハガキを書かされていたからなのだ。稲葉郡→稲葉城＝岐阜城のある「郡」であったが今は岐阜市に編入され消滅。寂し。

＊ 多少の出入りはあるが下総での本多家領地は幕末まで変わらない。

柏市域の田中本多藩領と周辺市域での領地詳細　（　村名　）

★柏市　船戸　・山高野・大青田・小青田・正連寺・大室・花野井・高田
篠籠田・松ヶ崎・布施　・藤心　・増尾　・逆井・塚崎　・大井
五条谷・大島田・若白毛・藤ヶ谷・高柳　（21ケ村）

★我孫子市　久寺家・青山・下ケ戸　（3ヶ村）
★流山市　鰭ヶ崎・加・西深井・東深井　（4ケ村）
★野田市　三ヶ尾・木野崎・目吹　（3ヶ村）
★鎌ヶ谷市　佐津間・粟野・道野辺・中沢　（4ケ村）
★松戸市　根本・竹ヶ花・千駄堀・矢ケ崎・馬橋・上総内　（6ヶ村）
★市川市　大野　（1ヶ村）　総計４２ヶ村

藩祖正重公

十二代正訥公

正訥公の墓

★上記42の村名を現代の県地図（昭文社版）で照合したら全部町名としてあった。ワォ！感動した。

☆ 本多家の下総領地は42ヶ村と41ヶ村の2説があり各資料に混在する。徳川期を通して領地替えは多く、どの時代を取っての記述とするかの違いだろう。今回は典拠を柏市 郷土資料室の第15回企画資料（上図）とした。

☆ 次回は正重系の本多氏の系譜と各当主を探訪する。

あくまで物語ですので、軽い気持ちでのご指摘・ご質問は大歓迎です。　（文責：荻野）R2.4

新ふるさと・探訪　第45回（逆井・藤心のお殿様）

駿河国（田中藩）本多家物語③　（家系）

【正重系本多家の家系と特色】頼りになるお兄ちゃんがいた。

①　本多正重は徳川時代の藤心・逆井村の殿様第一号であった。自身は戦場（いくさば）を得意とする武将と言われていたが徳川には四天王がいた。超猛将の武将達で井伊直政・榊原康正・酒井忠次・本多忠勝である。彼らに比べると正重圧倒的に小粒。同流には本多忠勝がいるが（遠～い）親戚。しかし正重には頼りになる（兄）正信がいた。

②　兄正信は忠義一撤な三河武士には似ず、一向宗の一揆に加担し反旗をひるがえしたりして家康に2度離反し2度許される特異な行跡を辿る。正重も兄と同行す。

③　この兄弟、若い時にはヤンチャ（家康に反抗）をしたが、2度目の帰参の後は終生家康に忠誠を貫く。それは、「戦場で槍」の道ではなく「知略・謀略」に、戦後には領国経営への手腕に発揮された。智将であり優秀な官僚（役人）でもあったのだ。豊臣政権下の石田三成のようなタイプで”平時”にこそその実力が発揮された。

④　正信は高録を望まなかった。 家康の関東入府時には相模国に1万石を拝領したが、井伊（上野国箕輪12万石）榊原（上野国舘林10万石）本多忠勝（上総国大多喜10万石）に比べ、江戸町造りの働きはまだ先だとしても余りにも少ない。だが正信はそれを「よし」とした。ここに家臣としての役割を果たすが得られる俸禄や地位とは一線を画す近世型「忠義」のサムライが誕生。戦乱の世と異にする平時での道徳律だ。正重も然り。

【正重系歴代当主（逆井・藤心の殿様）の紹介】（出典はほとんどWiKi）

☆　初代 藩祖 本多正重（まさしげ）1545年生～1617年没　下総国船戸藩立藩

徳川家康の三河以来の譜代家臣。関ケ原の功で近江国坂田郡内に千石を拝領、後大坂の陣の功により下総国に1万石を拝領し船戸藩（現柏市）を立藩する。正重翌年死去。享年73歳、（嗣子が無く死ぬと「家」が廃絶される決まりがあったこの時）死を予感した正重、2度家康に帰参を赦された過去や嫡男がいない負い目を自覚し2000石の減額をあえて請願、旗本に自らを格落ちさせてでも「家」を残したようだ。嫡男正氏は豊臣秀次に殉死している。22年前の出来事で生存していれば48歳いくら戦国の世とはいえ泪の老武将であったろう。

二代目当主には、外孫の正貫（まさつら）養子となり家督を継いだ。

☆　二代 本多正貫（まさつら）　1593年生～1672年没　　旗本

母方のジジ様の家督を1617年に正貫は継ぐ24歳だった。下総の領地は変わらず住まいは当然江戸屋敷だろう。勤務先は江戸城での書院番、大名と何がどう違うのだろうか。藩主でない正貫であったが泉村（柏）で土地と本堂の寄進をした。龍泉院である。正貫公と柏市との縁は太く今に続く、憶えていたい大恩人である。（詳細は後日紹介）

☆　三代 本多正直　（まさなお）　生年～没年？　　旗本

正貫の嫡男、1664年に家督を継ぐ。（何故か、この殿様は詳細不明、資料ナシ）

☆　四代 本多正永（まさなが）　1645年生～1711年没　（復活）船戸藩主 上野国沼田藩主

正永1677年家督を継ぐ。32歳。知行は弟正方に千石を分与した為、七千石の旗本としてスタートするが、1688年寺社奉行に昇進、加増され一万石の大名となり（復活）船戸藩主となる。1703年に若年寄（現在でいうと営業本部長クラスか）に昇進し下総の領地はそのままで上野国沼田へ転封、翌年には老中（役員クラス）になり４万石を領した。正永は本多家にとって中興の祖であり、領民にとっては善政が続き安定した治世が何よりであった。

☆　五代 本多正武（まさたけ）　1665年生～1721年没　　上野国沼田藩主

先代に嗣子がいなかった為母の兄（叔父）の養子となり本多の家督を継ぐ。出身は名門越後高田藩榊原家の次男である。沼田藩主は1711年から死ぬまで務めた。

☆　六代 本多正矩（まさのり）　1681年生～1735年没 上野国沼田藩主 駿河国田中藩主

先々代正永の弟正方の長男正矩が家督を継ぐ。正矩にしたら父の兄の（本家？）の家督を継いだ、父は千石の旗本だったが自分は四万石の大名になった訳だ。幸運はなお続く。駿河国田中藩への転封が命ぜられた。温暖な地だ、下総の飛び地はそのままに（1730年）

☆　七代 本多正珍（まさよし）　1710年生～1786年没　駿河国田中藩主

先代の実子。四代正永に続いて幕府の老中を務める。優秀な行政手腕だったのだろう。今、残る塚崎の神明社と増尾の廣幡八幡境内に石の大鳥居を寄進した。縁が深い殿様だ。

☆　八代 本多正供（まさとも）　1746年生～1777年没　駿河国田中藩主

先代の実子。父の隠居に伴い1773年家督を継ぐが4年後に死去。享年32歳、薄命な殿様。

☆　九代 本多正温（まさはる）　1766年生～1838年没　駿河国田中藩主

薄命だった先代の嫡男。先代様、後継ぎはチャント用意していたのだ。紀伊守を拝命していたからはないだろうが、紀州から「紀州みかん」を藩内（田中）に取り入れ流通させて今につながる「静岡のミカン」の源流とした・・・という説もある。

☆　十代 本多正意（まさおき）　1784年生～1829年没　駿河国田中藩主

藩内に文武や江戸遊学も奨励、奨学金制度を設ける。寺社奉行→若年寄に昇進。

☆　十一代 本多正寛（まさひろ）　1808年生～1860年没　駿河国田中藩主

治政は弘化・嘉永・安政・の時、財政改革等の藩政改革に取り組む。藩校「日知館」を創設、松ヶ崎村（柏）の儒者「芳野金陵」を招く1847年。　黒船が来航する6年前。

☆　十二代 本多正訥（まさもり）　1827年生～1885年没　駿河国田中藩主・安房国長尾藩主

兄正寛（先代）の養子となり家督を継ぎ明治維新を迎え最後の藩主となる。郷土の儒学者芳野金陵が田中藩に仕えた時、正訥20歳、最適の教師であり影響を受ける。33歳で家督を継ぐと藩校日知館を江戸表に創設する又幕府の新設「学問奉行」の一人にも就任。1863年加村（流山市）に江戸深川にあった下屋敷を移転する。黒船より10年、世情不安が増す中、下総領地の重要性が増したのと江戸市中の混乱の増大の為だったろう。戊辰では尾張藩に恭順、奥羽越への出兵はなく安房国長尾へ転封（4万石）。

あくまで物語です、軽い気持ちでのご指摘・ご質問は大歓迎です。（文責：荻野）R2.5

新ふるさと・探訪　第46回（逆井・藤心のお殿様）

駿河国（田中藩）本多家物語④　下総での足跡1

【足跡①慈本寺（藤心）】田中藩士のお墓があった。

①　陣屋跡の碑から東南約200mの位置に曹洞宗のお寺慈本寺がある。創建は室町時代後期、本堂の左手には観音像が見護る永代供養碑があり、本堂脇には五百羅漢様が我らを出迎える。気が安らぐお寺だ。

②　かつて藤心陣屋で代官を勤めてこの地で没した田中藩武士3人の墓が今に残る。境内に入ったら真すぐ進み、本堂の左側を道なりにゆくと通路脇に独立した３ツの墓石が並んでいる。それこそが藩士の墓である。（上記📷参照）

③　3ツの墓石をそれぞれ紹介するが、実は何にも分からない。墓石に刻まれた文字を何とか読んで活字化するのが精いっぱい。雰囲気だけでも楽しんで頂きたい。

④　上の写真の一番手前の墓石

正面の戒名は「院・居士、院・大姉」の様式で立派、ご夫婦であろうし駿河国から赴任してきてこの藤心で倉品弥平吾さんは天保2年に亡くなられた。天保年間といえば大塩平八朗の乱（天保7年）を誘発した天保の大飢饉が有名だし水野忠邦の改革（天保10年～）があり幕藩体制のほころびが見え始めた頃であるが黒船の17年前で政治的動乱はまだ、弥平吾さん刀を抜いた事があったのか。

正面

氏品倉

天保二年卯月九月二十九日
廣德院關巖崇隆居士
廣寶院泰巖明鏡大姉

右側面

當所於藤心陣屋卒
倉品弥平吾　年四拾八歳
源廣備儀墓

右側面

右側面右端「當所・・」は「ココ藤心陣屋ニオイテ歳48才ニテ死ス」とでも読めばよいのか。それにしても「卒」の一字が何を意味するか不明。この一字、広辞苑をひも解けば①下級の武士②にわか、突然③終わる事④死ぬ事（卒去）⑤卒族等々、ウ～ン全部あてはまるのか。下級の文字が気になる、お代官様国元での身分はいかほど？

⑤　真ん中の墓石

前述の墓石と同じ倉品さんの墓であり「院・居士、大姉」の格式高く左右壁面に故人の由縁らしきものが刻まれている。建立廣備とあるので前述の弥平吾さんだ。

右上へ続く↗

正面

左側面

威德院俗名倉品弥平次博隆行年
七十四歳於駿孖田中城内卒同城
□藤枝養命寺葬之廣隆妻德寿院
者當所於藤心陣屋卒行年六十五
歳當寺葬之

氏品倉

文政五年天七月十四日
威德院深譽義海居士
德寿院□譽榮勝大姉
文政十一年天十一月□日

右側面

本多之家士
倉品氏
藤心陣屋
廣備建立

⑤　この墓の主、威德院こと弥平次さんは文政5年（1822年）に74歳没、お墓を作ったのは天保2年（1831年）に48歳で没した弥平吾さん、死の9年前なので当時39歳、二人の関係は何だったのか。年の差35歳、普通に考えて親子だろう。代官職はどちらが務めていたのか、弥平次さんが死んだのは藤心か国元の藤枝なのか確定できない不思議は深まる。

左側壁にある「田中城内・藤枝・養命寺」等は何を語るか。母親德寿院さんは藤心にて65歳で亡くなったようだ。文政5年（1828年）は息子弥平吾の死ぬ3年前であった。息子に看取られ母は幸せだったろう。この墓石の左側面の文章をもっと解析しなければならない。

⑥　一番奥の墓石　鈴木姓の墓石

この鈴木氏の墓石は倉品さん宅の墓石よりやや小さめ。戒名はやはり「院・居士、院・大姉」の格式を踏襲。右側面の記録によると田中税官の4文字冒頭にあり目をひく、「田中（藩）の税（年貢）管理官、鈴木五右衛門さんが疾（病）で歿（死）んだ。藤心村・・」文章の半分も分からない。衛院とは？□は何年なのだ。

死亡の元号や奥さんの俗名も不明。一番残念なのが左側面に刻まれている草書体の二十数文字である。いくら目をこらしても楷書体ではなく崩された草書体は浅学な私には一文字も読めない、古文書OKの方どなたかHelp。

氏木鈴

左壁

判読不明な草書体文字

正面

名臺院室□鏡大姉
□□院賢倫濤照居士

右壁

清□疾歿藤心村衛院□年十二月
田中税官鈴木五右衛門□□□

⑦　実のところ、代官屋敷がどの様に運営されていたのかよく分からない。代官（藩士）は徴税関係と殺人放火のような重犯罪は担うが、その他の日常的事件事故は村の（村方三役）と呼ばれる有力者の自治にゆだねられていた。代官所から各村への通達や指示は代官の補佐役の手代が務めた。手代は中相馬領を差配した船戸陣屋では花野井村の名主吉田某等が着任し、南相馬領を差配した藤心陣屋では藤ヶ谷の名主相馬某等などが固定ではないが任についていたようだ。藩士の勤める「代官」の職はどの位の任期であったのか？（徳川期も270年弱）時代によって変動があったと思うが、前記お墓の主の姿が少しは・。

私はこの夏には沼田や藤枝に行き郷土資料館や城址、図書館や（あれば）本多家の菩提寺を訪ねる積りだったが世の中の状況が今はそれを赦さなく、思わぬお触れがでた。「下総から国境越えの移動まかりならぬ」と。

嗚呼、まさに秋（とき）を待つべし。・・か。

藤心山慈本寺 本堂

注）参考文献・柏市史(近世編）・柏の歴史・歴史ガイド かしわ・柏市史年表・田中本多藩と柏市（郷土資料室）・PC（Wikipedia)・江戸幕府の権力構造（岩波書店）・日本の歴史巻16（小学館）・江戸幕府その実力者たち（人物往来社）・江戸300藩最後の藩主（光文社）金子幸司さんの談話（藤一町会）・鎌ヶ谷のあゆみ（鎌ヶ谷郷土資料館版、三.四訂版）・流山市史

注）この連載はあくまで「ものがたり」です。学術的には責任を負えませんので気楽に読み飛ばしてください。軽い気持ちでのご指摘・ご質問は大歓迎です。

（文責：荻野）R2.6

新ふるさと・探訪　第47回（逆井・藤心のお殿様）

駿河国（田中藩）本多家物語⑤下総での足跡 2

【二代当主、本多正貫（まさつら）公、領地の泉村
龍泉院（現柏市泉81番地）に深く帰依、土地や本堂等を寄進する】

① この龍泉院「リョウセンイン」という曹洞宗のお寺は国道16号線大島田近くにあるゴルフの藤ヶ谷カントリークラブのほぼ裏手側の「泉」という地名の所にある。

私は、同寺と本多家の由縁など全く知らずに故あって昨年3月なに気なく訪れた。サンハイツから約7km距離の近さである。この泉地区は今も昭和初期の風情をもつ風光であり家々のたたずまいである。

とても落ち着く空間であったし龍泉院はその主役でもあった。誰一人いない静寂の参道を進み簡素ながら品格のある山門前で帽子をぬぎお辞儀をしてご挨拶。「コンニチハ、お邪魔させて頂きます」と。

殿堂建立記念碑

天徳山龍泉院は建長五年泉村に創建されし古利なり開基は相馬小次郎師胤公にして開山は木更津市眞如寺六世量指長英和尚なり天文年間頃曹洞宗に属せるか寛永九年本多豊前守正貫公五世幽谷和尚に帰依し現在地約四町歩を寄進し諸堂悉く構築す十五世象山和尚代に至り本堂□□を再建し参道を開□せり後既に貳百□歳を経て老朽著しく先に香積を改築す昭和五十五年山林約貳千四百坪の処分金を資金に檀越より浄財を募り多額の喜捨を得る依て翌春本堂を解体し夏に地元棟梁に依りて客殿を新造す本堂は有井建設株式会社の施工にして同年秋十月に上棟し翌春三月に竣工す其後境内の諸整備を為し略輪奐を具えり依て茲に殿堂変遷の梗概を記し永く遺さんとす

昭和五十八年四月　落慶之令辰

當山三十一世大心宏雄謹記

境内に入り本堂でもう一度ご挨拶。次に本堂脇の碑に目が行き読み始めるとそこには驚愕の文面があった。左の碑文がその衝撃の全文だ。今猶、感動が蘇る。

「*赤字は私の脚色です」

② この記念碑には、なんと！かつて当紙で連載した相馬氏が記され、また今連載中の本多氏との由縁が記されているのだ。なんという奇遇か。相馬氏の建長5年（1253年）と本多家の寛永6年（1629年）は376年の時代空間を龍泉院で結びつけているではないか。

なに気なく訪れたお寺で晩年最大の関心事の結晶の塊を見つけてしまったのである。興奮冷めやらず、帰りでのバイクは少しスピードが出過ぎていたカモ。

③ 【記念碑文の少しの説明】】

「1町歩＝10反＝3000坪＝9900㎡」なので本多正貫公が龍泉院に寄進した4町歩は40反であり12000坪という事になる。又、1反＝1石（の生産面積）であるので40石相当の土地＝40人が食べてゆける程の土地なのだ。それに諸堂とあるから本堂や庫裏、その他観音堂や庵などを構築して寄進をしたようである。莫大な寄進である。

④ 正貫公のご住職への帰依の深さも分かるが、本紙5月号に本多家歴代当主を紹介したが正貫公は「母方のジジ様」の跡目を継いだそのジジ様が死の直前、世継ぎが嫡男でなく「孫」であることを主筋に忖度し俸禄を一部返上し船戸藩の大名格を辞退、大身の旗本に自ら降格してからの相続である。忸怩たるものが正貫公にはあったのではないか。また、三代目正直は二代目の嫡男ではあるが、その姿を綴る資料があまりにもない、なさすぎる。そして四代目正永久が優秀すぎる程優秀である。戦のない世に7000石の旗本を皮切りに出世を続け4万石の大名になったからである。とにかく本多家の二代～四代様はお姿や業績の濃淡や特徴の有無が有りすぎ興味深い。小説家がとりあげたら殿様達のお家の事情の悩み、宗教への帰依、幕閣での権謀術数、お家騒動等小説のネタがテンコ盛りになりそうである。勿論これは私の個人的推測ですが・・・。

⑤ 幕末、勝海舟の父「勝小吉」は41石取りの御家人であったが貧乏で苦労をした。正貫公の寄進はほぼ同じの40石、江戸初期だから価値の高さは比べようもなく高い。お寺側の感謝の念は強く現代につながっていた。（昭和55年に一部を売却し本堂新築の費用とした）

同寺、天徳山龍泉院の発行物「龍泉院だより」（平成31年1月号）が今、私の手にあるがその3頁目に「中興開基牌がお厨子に」と題した小文が載っている。その内容は。

【 -前略- 当山の中興開基である本多正貫公の大名位牌が昨夏に完成して奉祀 -中略 お厨子を新調して -中略- 今から384年前に現在地4町歩と全伽藍を寄進してくれた大恩人 -後略- 】とあり、人の営みと思いは歴史の中でかくも（今年で388年）生き続けるものかと改めて感じ入る。

注）泉村が本多家の領地であったのは江戸初期だけの様だ。幕末の差配地に泉村の名はない。
本シリーズで4月号（本多家物語②）で柏市内でかつて差配した村を黒塗りにしてあったが泉村は白地になっている理由である。その図は江戸中期頃と思われる。かくも縁が深い泉村が本多家と切れてしまった理由は分からないが、何か、とても残念な気がしてならない。せめて泉村のその後の領主は幕府直轄、旗本領、大名領いずれかだが後日調べてみようと思う。

注）この連載はあくまで「ものがたり」です。学術的には責任を負えませんので気楽に読み飛ばしてください。
軽い気持ちでのご指摘・ご質問は大歓迎です。　（文責：荻野）R2.7

新ふるさと・探訪　第48回（逆井・藤心のお殿様）

駿河国（田中藩）本多家物語⑥下総での足跡 3

七代当主 正珍（まさよし）公　石鳥居を奉納

令和の世に伝わる、塚崎神明社と廣幡八幡宮

六代藩主本多正矩（まさのり）公が沼田藩（上野国）から幕末迄続く領地、田中藩（駿河国）に転封（任地替え）してから代を継いだ藩主が、七代当主本多正珍（まさよし）公だ。正珍公、生まれは宝永7年（1710）父の田中藩への入府が1730年だからその時は20歳の若様。寒風吹きすさぶ上州から雪のない温暖な駿河へ、若が”ラッキー”と言ったかどうか。それより恐らく江戸屋敷生まれ、この20歳の時までお国（上州沼田）入りしたことがあるのか不明。案外江戸市中で屋敷の引き越しで終わったか、又は今住んでいる拝領屋敷の呼称の変更で済んでいたカモ。この殿様、歴代のご先祖と同じく、幕府の要職を務めた。奏者番→寺社奉行→老中と順調であったが、美濃国郡上藩で起きた大規模な百姓一揆（引責で領主のの金森家が改易される）への幕府介入の沙汰に、担当老中として「不適切コレあり」ということで老中職を免職される不運もあった。現在でも大臣が引責辞任する時があるアレである。

でもこの殿様、飛び地の下総の地元は幾度となく親しく巡回していたようだ。今回は塚崎神明社と廣幡八幡宮の地元神社を紹介し正珍公と我々現代の住民との深い由縁を偲ぶ。

塚崎神明社（塚崎846番地）

- 創建：鎌倉時代末期　・主祭神：天照大御神
- 例大祭：10月17日　・かしわ七福神の大黒天が鎮座
- 徳川家康より10石の御朱印地を賜る

① 逆井商店街通りを逆井駅と反対方向に道なりに何処までもゆく、途中に八幡様や八幡苑、慈本寺等がある、道のり約1.8km歩くと県道「船取線」にぶつかる、その道の向こう側が神明社である。総本社は伊勢神宮だ。

② 参道の石段（右写真）を登りきると、更なる石段があり、拝殿を前にして石鳥居それに狛犬が続く。数段の石段を登ったら、石鳥居の左柱にご注目。そこには1文字10cm四方大の文字が25文字ある。

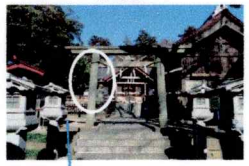
③ この石鳥居をいつ誰が奉納したかが記されているのだ。それは宝暦7年（1757年）2月で、奉納は本田正珍公である。公は漢学に造詣が深いのか漢風表現が多く理解が難しい。でも大丈夫、右柱の傍に柏市教育委員会（平成29年3月作）の説明板があるのでご覧頂きたい。公の身分（藩主）や立場（幕府老中）の漢学的の表現らしい。

④ 正珍公は1746年の時36歳で老中職に就き、12年間48歳まで務め職を解かれた。塚崎神明社に石鳥居を奉納したのは、その前年1758年47歳の時である。責任を負わされ免職という面はあったが12年間の老中職を勤め切った・・と満足感で心安らかな時であったろう。

⑤ 同時期にこの石鳥居は、今回右欄に紹介する、増尾の廣幡八幡宮と次月号紹介する布施弁天（東海寺）にも奉納されたのだ。

そして公は、この後約30年を生き1786年に逝去、享年76歳

参道



部分拡大

余談：駐車場のトイレの表示が面白い。
姫君は最高、殿方は様ならなお良い！

廣幡八幡宮（増尾895番地）

- 創建：鎌倉時代末期　・主祭神：八幡大神（第15代応神天皇）
- 元日に2回：浦安の舞 奉奏　・春、秋に大祭
- 徳川家光より10石の朱印地を賜る。

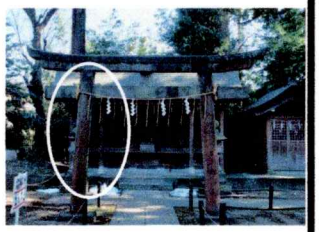
⑥ サンハイツにお住みの方々は1度は参詣されているのでは、と思われる。ニッカウイスキー柏工場の道奥の廣幡八幡宮、住まいから1.8kmの距離か？

⑦ 塚崎神明社や廣幡八幡宮、こんな近距離に格式の高いお社が鎮座されているのには驚く。共に創建は鎌倉時代、江戸期に神明社は家康から廣幡八幡宮は家光から、それぞれ10石の朱印地（武家でいう領地）を賜る庇護を受けている。相互（桔抗）。

⑧ 第一の鳥居（上写真）は参道入口、築は平成5年3月（皇太子殿下ご成婚記念）と新しく氏子の方々の奉納だ。

一の鳥居（参道前）

⑨ 参道を進み、拝殿でご挨拶の後、90度右を向くと第二の鳥居（下写真）がある。それこそが、本田正珍公が奉納した鳥居である。263年前に。塚崎神明社の鳥居と同じく左柱に太々と奉納の芳名が刻まれている。指でなぞるが深さは1cmはある。指先に263年前の時代感が伝わってくるようだ。東日本、関東大震災他あまたの地震に良く耐え今日の日を迎えている。感動



二の鳥居（拝殿横）

⑩ 鳥居の一番上の横棒を笠木（かさぎ）という。伊勢神宮系列の神明社は「神明鳥居」と言いこの笠木は直線である。八幡系は「八幡鳥居」と言いこの笠木の両端にそりがある。正珍公はよく分かって発注していた様だ。

余談：鳥居の右柱、塚崎神明社は相馬郡、廣幡八幡宮は東葛飾郡と刻まれていた、境界は？

注）この連載はあくまで「ものがたり」です。学術的には責任を負えませんので気楽に読み飛ばしてください。
軽い気持ちでのご指摘・ご質問は大歓迎です。　（文責：荻野）R2.8

新ふるさと・探訪　第49回（逆井・藤心のお殿様）

駿河国（田中藩）本多家物語⑦　下総での足跡 4

【五代当主、第二代沼田藩主　本多正武（まさたけ）公】
布施弁天＝東海寺（柏市布施1738）に本堂寄進】

千葉県指定文化財
（建造物）
関東三弁天の一つ
布施弁天東海寺本堂

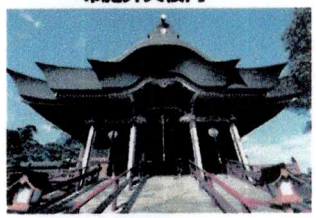
① 浅草・江の島に並び「関東三弁（財）天」と称せられるは柏市布施にある布施弁天（東海寺）である。本多家五代当主（沼田藩二代目藩主）本多正武公が他の大名に奉加帳を廻し声掛けをし、浄財を集めて戦火で荒廃していた同弁天の本堂を寄進した。

② 時に享保2年（1717年）この時の本堂は長命を保ち令和の今も現存して千葉県の指定文化財（建造物）となっている。実に303年前の再建、年代は享保なので暴れん坊将軍徳川吉宗の時代（マツ健サンバ）のあの人でなく本物の八代将軍の時の建物をこの目で見て触れるのだ、大したものだ！

布施弁天楼門

③ 本堂の奥半分（内陣）の格天井にはこの時の奉加に応じた大名の家紋が描かれていると本堂脇の説明板にあった。当然本多家の「立ち葵」もあるのだろう。（右図参照）
三つ葉葵の紋は徳川家のみの家紋だが、本多家は「立ち葵」としての使用を許されていた。家門の誉であったろう。各大名の家紋が描かれているであろう格天井は本堂の奥部であって残念ながら通常は見ることがかなわない。

奉納した殿様はだれかハッキリはしないが、本堂右壁には大きな「絵馬」がある。又楼門に続く参道の入口に石の鳥居が寄進されたこともある。
今ある鳥居は新しく「祝 千二百年祭　2008建立」とあるので最近のものだ。七代当主正珍（まさよし）公がこの布施弁天にも鳥居を寄進したとの話もある。
（裏付け資料は現在の所確認が出来ていない）



本堂

本多家家紋 立ち葵

余談：徳川軍も結構頑張ったのだ。

① 左ページに紹介した布施弁天（東海寺）と周辺集落に土方歳三と旧幕軍江戸脱走兵数千が突如現れる。中には質の悪い無頼も交り恐喝強盗もおきる。幕府は既になく公的秩序は無い、そこへ奥羽へ帰省する諸藩の婦女子の一群も加わりモウ大混乱。

② ところで、どうして土方歳三がこんな所（柏）にいるのか？それはヤル気満々だが城は政府軍の手に落ちて憤懣やる方ない旧幕府陸軍（伝習隊＝仏式軍隊）＋諸隊約数千を奉行の大鳥圭介が率い奥州を目指していた。そこに加ったのだ。

（新選組には会津で再会）
←私の若い時デス（大鳥圭介）

③ 維新時、西郷と勝の会談で江戸城の城攻めは中止された。現代の多数の人はその後上野戦争は別にして、スンナリ奥州へ戦火は延焼してゆき翌年函館にて終了と捉え徳川「脆し」「骨なし」との印象を持っているのではないだろうか。徳川の名誉挽回の為「徳川勢の反抗」の少しの事例を紹介したい。

月	日	慶応4年1月～9月迄の年表
1.	3	鳥羽・伏見の戦い
2.	11	徳川慶喜上野寛永寺に謹慎
3.	6	甲州戦争・新撰組150×土佐藩兵交戦
4.	3	近藤勇 流山で捕縛 ⋮
4.	11	江戸城開城→慶喜水戸へ、榎本海軍館山へ、大鳥陸軍市川へ、撤兵隊2000は木更津へ脱走、土方歳三大鳥軍へ合流
4.	13	緒隊合わせ大鳥軍4000強、市川→松戸→布施→取手→宇都宮→日光へ
4.	18	田中藩、船戸藤心陣屋代官、加村へ退去
4.	20	岩井関宿戦争 純義隊+誠忠隊×薩摩兵と交戦
4.	25	近藤勇 板橋で斬首 ⋮
閏4.	3	市川船橋戦争 撤兵隊×薩摩、佐土原、津岡山藩兵と交戦、1日で敗退
5.	15	上野戦争　彰義隊+諸隊×政府軍と交戦
5.	23	飯能戦争 振武隊（渋沢軍）×政府軍と交戦
5.	30	奥羽越列藩同盟成立
9.	8	元号明治に改元、江戸を東京に改称
9.	22	会津若松城落城

④ 上記年表で4月11日は、江戸城が完全に開城した日であり慶喜が水戸へ落ちた日だ。
同日に、多くの幕臣がそれぞれの思惑と武力を持ちそれぞれに陣を動かした。大きく分けてそれ等は6派あり行く先は・彰義隊上野・榎本海軍→館山・大鳥陸軍→市川・純義隊市川→岩井、撤兵隊→木更津、振武隊上野→飯能、他に説によると100に及ぶ隊があるが○○戦争と後世に名を残す戦を戦った3部隊だけの紹介にする。他は紙面の関係で省略残念！

純義隊＆誠忠隊　岩井・関宿戦争　市川の大鳥軍に合流したが方針の違いで分かれて（両隊で500名程）日光を目指すも岩井・関宿で薩摩、大垣藩兵と交戦、1日で敗退。（4月20日）

撤兵隊　市川・船橋戦争　幕府軍制改革の歩兵軍団、旗本福田道直は江戸開城時撤兵隊（2000名程）を率い脱走、木更津へ房総で資金や兵力増強を図るも難し。半数の兵力で船橋、市川に進出、大鳥軍と合流しての江戸奪還をめざすも大鳥軍はすでに布施に移動、残念！備前、薩摩、津、佐土原の藩兵と交戦、船橋、市川の宿を焼くも1日で敗退。（4月28日）

振武隊　飯能戦争　上野彰義隊結成者の1人（渋沢栄一の甥）渋沢成一郎は上野の山で方針の違いから分派。「振武軍」を結成出身地深谷への要所「飯能」に進軍した。そこで、上野戦争を終えて残党狩りの政府軍と交戦。半日で敗退（5月23日）

注）この連載はあくまで「ものがたり」です。学術的には責任を負えませんので気楽に読み飛ばしてください。
軽い気持ちでのご指摘・ご質問は大歓迎です。　（文責：荻野）R2.9